南山大学社会倫理研究所
2004年度第3回懇話会 ▪講師　竹中 千春先生▪

講演の概要

2004年10月30日(土)、南山大学J棟1階特別合同研究室にて開催された社会倫理研究所2004年度第3回懇話会において、明治学院大学国際学部教授・竹中千春先生による「対テロ戦争とアジアの市民社会―暴力の連鎖を解くのは誰か？」と題する講演が行われた。まず、「豊かな世界」と「貧しい世界」の分化が指摘される。「豊かな世界」とは、政府、軍隊、警察、司法制度などによって安全が保障された世界(「戸締まりされている世界」)であり、「貧しい世界」とは、治安が悪く無秩序で危険な世界、そこに暮らす人々の「命の値段」は安く、マフィア集団が根を張りやすい世界(「戸締まりされていない世界」)である。この2つの世界の分化は、どこの国、どの地域にもその内に存在する分断線であり、「対テロ戦争」の思想は、この2つを「われわれ」と「やつら」の二分法に基づいて分断させる考え方である。この思想には、「行ってはいけないところをつくらない」、「行ってはいけないところに行った人たちも助けなければならない」といった発想はない。続いて、こうした世界の2分化における暴力の構図へと話は進む。「安全で豊かな世界」のもつ正当的で制度的な暴力(軍隊、警察、治安部隊)も、「危険で貧しい世界」にある非制度的でインフォーマルな暴力(武装勢力、テロ組織、マフィア組織)も、ともに暴力を組織した「プロの暴力集団」であり、紛争や内戦は彼らによって企画し実演されることが多い。したがって、暴力の連鎖を解くためには、そうしたプロの暴力集団が動きにくい世界を構築することが必要である。信念、人、武器、資金、情報、ネットワークが暴力の6つの要素であり、さらに、紛争地域、暴力的な過疎地、暴力的な大都市の三つ巴の連鎖が、現代における2つの「世界」を結ぶ「暴力の空間」を形成している。また、「危険で貧しい世界」から「安全で豊かな世界」への移民、留学者が、自国ではエリートなのにそこではマイノリティである、という形で「安全で豊かな世界」の疎外の構造に直面し、そこから自己正当化のイデオロギーが生み出され、そのイデオロギーが自国に逆輸入されることで、ファンダメンタリズム的なイデオロギーが再生産されてゆく、という「人間的な連鎖」の解き難さがある。さらに、アフガニスタン、パキスタンなど世界中で起きている紛争においては、米国が国益のために利用した暴力の構図が、反米に向かう暴力の構図へと反転している。また、民主化と暴動・内戦はセットで起こることが多い。こうして複雑にリンクした暴力の連鎖は、特定の国への爆撃では到底断ち切れず、むしろ暴力のネットワークを拡大・拡散させてしまうのである。最後に、「暴力の連鎖を解くのは誰か」という問いに対して、プロの暴力集団ではなく、武器をもたず暴力を使わないことをまず第一の発想とし

て生きている人たちである、と竹中先生自身の回答が提示され、「民主主義の非暴力化」、および、暴力地域になる可能性のある「貧しい世界」における市民のエンパワーメント、コミュニティ復活、そうした地域の人々とのネットワーキングの必要性が主張される。(文責｜奥田)

＊以下のコンテンツは、懇話会で録音したものを活字化し、講演者本人の校正をへて作成されたものです。無断の転用・転載はお断りいたします。引用、言及等の際には当サイトを典拠として明示下さるようお願いいたします。

対テロ戦争とアジアの市民社会—暴力の連鎖を解くのは誰か？

竹中千春 (明治学院大学国際学部教授)

もくじ

破壊の光景｜安全で豊かな世界、危険で貧しい世界｜暴力の構図｜紛争の地図——なぜイスラムか？　なぜアメリカが対決するのか？｜暴力の文化と処方箋｜暴力の連鎖を解くのは誰か｜

▲報告資料

1. 破壊の光景

対テロ戦争の時代について、どのように考えることができるでしょう。普通の市民として、いったい何が考えられるでしょう。10年ほど前マドリッドに行ったとき、戦争によって殺された死体や犬を描いたゴヤの絵やピカソのゲルニカの絵を見たことがありました。そのとき、原爆の絵を描いた丸木夫妻の絵も思い出しました。戦争のような流血の惨事。そして、テロ後のニューヨークの光景が「グランド・ゼロ」と呼ばれたことは、記憶に新しいと思います。このような「破壊の光景」が、21世紀の対テロ戦争の時代の幕を開けました。この、どうしようもなく残酷で巨大な破壊を、私たちはどのように受け止めればよいのか。これが、現代世界の市民に課された問いなのではないかと思っています。対テロ戦争に走り出す前に、どう受け止め理解すべきなのか、です。まさに、これらの「破壊の光景」は、言葉にならない、言葉以前の黙示録的な破壊の図、地獄絵のようなヴィジョンです。

ある意味で情報の速さがあって、いま言ったように、非常に大きな破壊を抱えざるを

得ないグローバルな状況にすべての人が何らかの形で巻き込まれている。逆に言うと、そういうものをヴィジョンとして見せられる人間が——私たち一人ひとりですが、平和の光景、安定の光景、幸せの光景というものを実感としてはとらえにくい。ニュースでは戦争や破壊など悲惨な光景が強く報道されますから、普通の市民としては、世界がこのまま安定して21世紀の終わりまで存在するだろう、自分たちの子供はきっと幸せに生きていけるだろう、その孫も生きていけるはずだ、という、本当に簡単なことですが、未来を信じて生きていくことが難しい時代になっているとも言えます。

にもかかわらず、私たちは、今現在、子どもや学生さんという若い世代を育て教えていく立場にあります。そういう自分を考えたとき、いままで生きていて幾分かは残酷な事件にも慣れているかもしれないのに、その自分ですらこんなにショックを受ける。それなら、若い学生さんはどうなのだろう。あるいは、もっと小さな子供たちはどうなのだろう。人類の未来とか、この研究所の名前の「倫理」、あるいは似たような響きのある「道徳」「良心」「助け合い」、きょうの報告タイトルに入れた「市民社会」などを実感して育つことができるのだろうか。これは私自身の深刻な問題です。

今回『世界はなぜ仲良くできないの？』という本を書いたのですが、これは、殊に若い人に向けて、自分たちの世界は自分たちでつくっていける、つくっていかなければいけないというメッセージとして書きました。教える者の立場から、若い人を育てる立場から、市民自身がエンパワーしながら世界を平和なものにつくっていけるというメッセージを送りたかったのです。そうでないと、悲惨な話はもうほっといてくれという反応を広めてしまいます。ですから、そうした拒絶反応を越えて、市民が平和のヴィジョンをしっかり持って生きていくためのメッセージを、教師や親が伝えなければいけない時代になっているのではないかと思っています。

そういうことを言うとちょっと変わった先生だと思われたり、学会に行って専門の国際政治などを話すときにこんなことを言うとシカトされたり、報告させてもらえないかもしれないのですが、やはり自分たちがいま議論している、例えば国連の問題や平和構築、あるいは人道的介入などというものを突き詰めていって何を考えるか。いつもはほかの人たちに言わないような問題ですが、若い人たちにはやはりそこから語っていかないといけないのではないかと思っています。憲法９条を変えよう、日本の軍隊をさらに強くしよう、戦争は正しかったと主張しよう、といいたい学生さんもいます。ある意味では、そういう人たちと正面から議論をするためにも、少なくとも私の中にある平和への思いを、やはり学問的な言葉で提示しなければいけないのではないかと思った次第です。

そうは言ってもウェットになりすぎないように、以下の本論では、国際政治学会でも報告させてもらえそうな、現代暴力についての分析を話ししていきたいと思います。

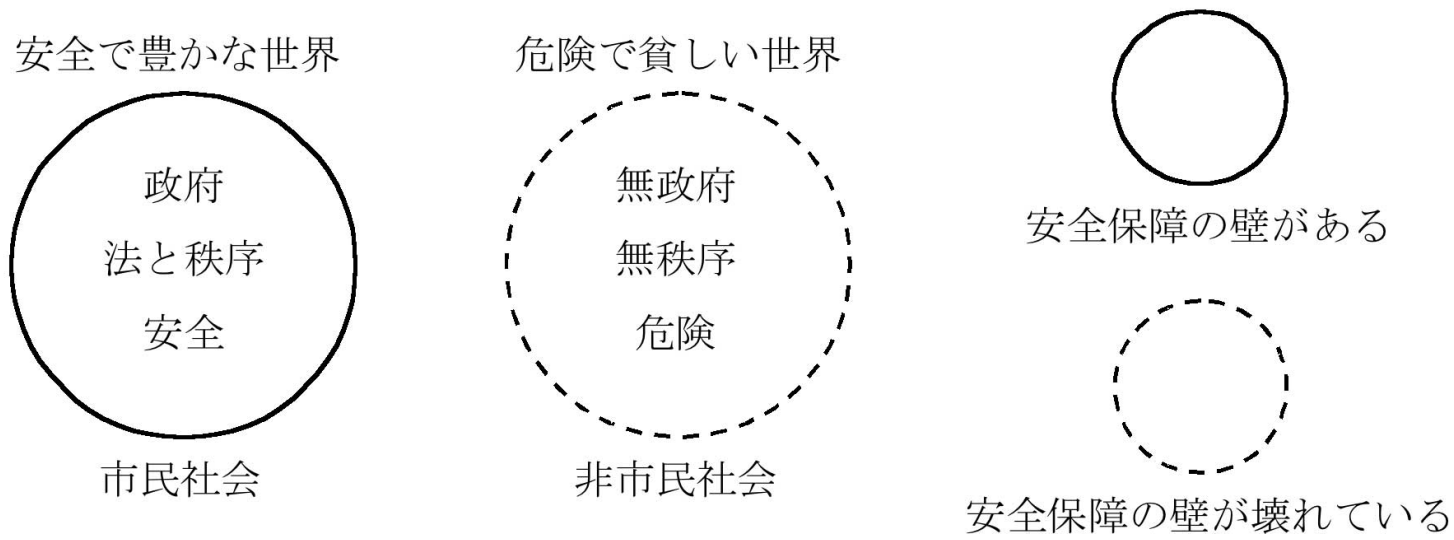
2. 安全で豊かな世界、危険で貧しい世界

プロとして、市民の方、あるいは若い方々に、どのようにしたらわかりやすくとらえ

ながらこの世界を説明できるかということで、非常に雑駁ですが、シンプルな議論をしてみました。つまり、「国際政治は複雑だから私たちにわかるはずがない。だから無関心でも仕方がない」あるいは「私の意見は大事ではないと思う。だから何も言わない」というのではなくて、やはりどこかから取っかかりをつけてこの世界をとらえていこうよ、ということです。これが、私の問題提起です。

ある意味では簡単な話ですが、世界は現在グローバリゼーションで一体化している、あるいは市場経済で一体化していると言われます。その一体化するスピードが速いからこそ、逆にギャップというか、濃淡や広がりなどいろいろな違いが現れています。つまり、多様な格差が世界中に培われているのです。これを図１にしてみました。

図１



つまり、先進国と途上国がある、南北問題があるという問題にとどまらず、先進国アメリカの中にも安全で豊かな世界と危険で貧しい世界がある。日本の中にもこの２つの世界がある。あるいは、同じ南山大学の周りの住宅地にもある。そういう発想です。ですから、平均的に貧しい途上国、たとえばインドでは、日本よりも危険で貧しい世界にシェアが傾きますが、同じインドの中にも安全で豊かな世界はかなりある。とはいえ、危険で貧しい世界が広がっている。つまり、どちらかと言うと、これは昔の社会学的な言葉で言えば「理念型」です。要するに、対抗軸というか、２つの異なった世界を対照して考えてみましょうということです。ですから、途上国やテロが発生するような紛争地域、あるいは危険な「ならず者国家」に問題がすべてあるという発想ではなくて、これは実はどこの国、どこの地域にも抱えている分断線であるということです。

左側の安全で豊かな世界は、私たちが常に日本において想定するような社会です。要するに、少なくとも普通は安全性と豊かな生活が保障されている。この間、台風や地震で壊されましたが、普通は安全で豊かだと保障されていて、そこにはきちんとした自分たちの政府があって、政府は自分たちを守ってくれることになっていて、法と秩序がある。ですから、一応、市民が法によって自分たちの生活や安全を守ってもらえると前提にできる世界です。もっと言えば、人権、自由が保障される度合いが、ある意味では高いということです。本当に完全に豊かな世界ですべて保障される世界はほとんど実在しませんが、そういう理念型として考える。普通議論するときには、どこかに理念型が存在しているだろうということを考えながら、「市民の社会」「市民の権利」「市民の義

務」あるいは「市民の選択」という言葉を使っています。

しかし、右側の世界は、はっきりとdeconstructされた、distortされた、あるいはdestructされたと言いましょうか、要するにdangerousなのですが、危険で貧しい世界です。これは、政府があっても自分たちを守ってくれるどころか、むしろ自分たちを弾圧したり、殺したりするかもしれない。あるいはきちんとした政府がない。どこかの武装勢力が牛耳っている。あるいは内乱状況である。そういった地域です。これは別に国全体という必要はなくて、辺境地域とか、あるいは紛争地域がこういう状況にあるといったような状況が、例えばスーダンや2001年前のアフガニスタン、現在のアフガニスタンもはっきり言えばかなりこれがあるわけですが、現在イラクはこれになってしまったということになります。例えば、インドなどではカシミールの内戦地域はこれに入りますし、あるいは盗賊がたくさん出るような島とかジャングル、砂漠地帯などはこういうところに入ります。

しかし、別に危険な国や辺境地域だけではなくて、アメリカとか日本の大都市でも、例えば歌舞伎町とか渋谷は怖くて行けない、夜、行ったら危ないというようなところ、マフィアあるいは暴力団が仕切っていたり、多国籍のマフィア組織が仕切っていたり、警察も入って来られない、あるいは警察もスラム地域であれば住民を敵にするといったような地域は先進国にももちろんあります。ですので、同じ１つの国にありながら、そして同じ１つの都市にありながら、東京、ニューヨーク、ロサンジェルス、フィリピンのマニアとか、私が知っている都市を言っただけですが、インドのデリーであろうが、イギリスのロンドンであろうが、夜、行ったら何があるかわからないよという地域と、ミドルクラスあるいはアッパーミドルクラスのこの住宅地は本当に安全という地域が、ある意味で共存するということになります。

デリーやマニラでは、壁１つとか道路１つでスラムと高級マンション、高級ビジネスビルディングが併存している。すごく高いホテルの横にはスラムがあるといったような状況があります。こちらは警察が一生懸命守ってくれるので安全、逆に言うと、泥棒や強盗もそんなに襲わないのです。ミドルクラスの人たちを襲うというのは大変なことなので、仮に暴動があってもそんなことはあまりありません。しかし、スラムというのは常に警察とかがある意味で敵視していたり、犯罪者もここに逃げ込んで銃撃したり逮捕したりするし、それだけではなくて、暴動が起こったりすると最初に殺される人たちはスラムの人たちです。バグダッドでもかなりそういうところはあったと思います。要するに、より命の値段が安いところ、そしてマフィア集団も根を張りやすいところがある意味では併存している。

こういうところを私たちは民主化したので市民社会だと呼びますが、現実には人権とか政治的な自由、財産も含めて守られにくい。ですから、勝手に造語をつけましたが、こういうところを市民社会とは呼べないということで、とりあえず「非市民社会」という概念としてみました。

左側の社会については安全保障の壁がありますので、政府、軍隊、警察が守ってくれ

る、司法制度が守ってくれる、人権が保障される。ですから、戸締まりされているという感覚がある社会です。右側は戸締まりがされていない。警察も軍隊も家の中にどんどん入ってくるかもしれない。マフィア、武装勢力が入ってくるかもしれない。そうじゃなくても、こそ泥もどんどん入ってこられるという世界です。いまの新潟の人たちがどうしても家の前から動けないで車の中にいるのは、泥棒が入ってくるかもしれないから近くにいるわけです。安全保障の壁が壊れると、それがとてもよくわかります。普通の人たちはそれがあるところで生活しているという前提で生きているということです。

世界はいま安全で豊かな世界がいろいろな経済的なリソースとか政治的な力、軍事的な力もある意味では持っていて、危険で貧しい世界はそれが非常に少ない。対テロ戦争というのは、この２つの世界をはっきりと分断させるような考え方を持っている思想だと思います。つまり、あっちからあっちは危ないところ、行ってはいけないところに行ったから死んでもしょうがない、小泉さんの話はこれです。行ってはいけないと言っているのに行ったのだ。行ってはいけないところをつくってもいけないし、行ってはいけないところに行った人たちも助けなければいけないという発想ではなく、イラクの人質事件はこっちからこっちへ行ってしまった人はいけませんよという発想です。私たちはいま、対テロ戦争の枠組みでいろいろな世界を解釈してしまっているわけですが、その前提には、私たち、われわれWeというか、安全で豊かな世界と、彼ら、やつら、Theyというか、危険な人たち、あるいはそこに住んでいるしかない人たちというように選別して考えているという２分法があるのではないかと思っています。

3. 暴力の構図

もう少しお話ししますと、この２つの世界は安全と危険という軸で考えているのですが、豊かな側はセキュリティー・システムにお金がかけられますから安全です。貧しい側は保障できるものが何もないので危険なのですが、だいたいこれは２つ込みなので、これを隔てる１つの大きなものが暴力の存在の仕方だと思います。これもかなり粗っぽいですが、「暴力の構図」というものでその部分を示してみました。

資料には載せていませんが、安全で豊かな世界が正当的、制度的に持っているものとしての暴力、つまり軍隊、警察、治安部隊、あるいはそういうものが国際社会に供出された形のものとして国連軍と呼ばれるようなさまざまなＰＫＯとか、介入するときの軍事力といったものは、基本的には安全で豊かな世界の制度的なチャネルを通して合法的、正当なものとしてつくられますので、普通はそれをきちんとした暴力と考えています。

逆に、もう一方の暴力は、ポジとネガみたいですが、市民社会の制度とか国際社会の制度や法といったものにのっとらないで、それと外れた形で形成されている暴力なので、いまはだいたい悪い方に分類されます。かつてはこっちが正しい、革命勢力だという時代がありました。しかし、冷戦が終わって左翼革命勢力の評判は地に落ちているので、革命的な武装抵抗という発想は普通の人でも非常に少なくなっていて、全部インフ

ォーマルな悪い暴力になっているわけです。かつては、ジャングルでゲリラ戦をするとか、毛沢東主義とかがそれであったわけです。いまも存在はしていますが、実体としてもかなり革命的イデオロギーが力を失っていますので、現実にも単純な武装勢力に非常に近くなっているところがほとんどです。かつてはいい者もいたはずなのだけれども、いまは反政府武装勢力とか国際テロ組織と呼ばれる、あるいは先ほども言ったように、そんなに大してイデオロギーなど全然ないのだけれどもマフィア組織と言われるような暴力団など、そういう私的な軍事力があります。あるいは、地主さんが持っている私兵団とかいろいろあります。だいたいが持っていればだいたいいいことになったりするので、地主さんが持っているときには私兵団でも警察と仲が良かったりいろいろありますが、私的なもので、しかもインフォーマルで国家と対決するようなものが、非市民社会の側にはびこるというか、あるいは持つ側の暴力集団ということになります。

一応、普通の私たちの発想からすると、暴力集団は制度的でいいものと非制度的でインフォーマルで怪しいものという２つに分かれると考えます。ですから、普通こっちがやるといいことで、インフォーマルな方がやるとテロリストだとなってしまったりするわけです。しかし、いずれにせよ、どちらも暴力集団です。両方ともが暴力を組織した集団で、しかも現代世界の紛争や内戦と言われるものは、このプロの暴力集団が企画し、実演するものであるというのが私の議論です。

それはどうしてかと言うと、テロ、武装勢力、内戦と言うと、市民戦争になって普通の人たちがすべて武器を取って、ジャングルや乾燥地帯から戦ってという発想をしますが、現実には紛争地域、あるいは暴動が起こった地域や内戦地域でも、AK47とかそういうマシンガンを持っている武装勢力と、そんなのは全く持っていない普通の人たちというのは全然違って、要するに武装勢力が内戦や戦争、あるいは暴動を仕切っていくのです。

私はインドで研究したのですが、暴動と言うと、普通の人がみんな最初からやるみたいですが、途中ではみんな参加せざるを得なかったり、とかいろいろあるのですが、だいたい暴動を起こすのはプロです。ガソリンとか斧とか、いまは携帯とかジープとか、そういうものを全部用意して、自分たちの側がこういうことをされたというのもほとんど演出だったりします。それから、タイミング的にも、恐ろしいことに割とテレビが来ると暴動するのです。テレビのクルーが来ないと何もしないで、あっ来たぞとなると、うわーっとやるのです。普通私たちが自然発生的に合理的でない人たちが暴動を起こしていると思うものも、実はプロの暴力集団であるマフィア集団や過激なファンダメンタリスト集団が企画して、実演して、しかもグローバル化時代にはメディアを使ってそれを発信するのです。発信しないと不成功だと。

インドなどでは、ヒンドゥー・ファンダメンタリストがセントバレンタイン・デーにチョコレート屋さんとかカード屋さんを襲うのです。TVクルーが来ないうちは待っていて、来たら、うわーっとやって、それでテレビには「シヴ・セナがデリーのチョコレートショップを」とかと出るのですが、シヴ・セナたちはミドルクラスやアッパー・ミドルクラスは絶対襲撃しないのです。目立つところにいて、自分たちがうわーっとやっ

て、それを例えばCNNとかBBCが伝えれば、インドの右翼は怖いとなります。

変な話ですが、ビンラディンと同じで、テレビでこれが映ったら全国で一緒にやるぞという合図だったりするのです。だから、テレビで「いま、ここの地域で寺院が攻撃された」と言うと、こっちでやるともう準備していますから、行くぞというサインなりホイッスルなのです。ですから、そういうのも含めて、結構ナイーブではないのです。プロの集団が暴力を使ってどうやって自分たちの利益を実現するかということを常に考えて、いろいろな武力闘争は起こっている、あるいは暴動というような民衆的なものが入るようなものもプランニングされているということです。

そういうことを考えると、どのようにそうした暴力の連鎖を解いていくのかというのはかなり根深くて、そういうプロの集団たちが動きにくい世界をつくっていくしかないということになります。つまり、プロの集団たちは、お互いにプロの集団として敵と味方を持っていて、要するにお互いを利用し合って権力を持っているのです。

さきほどシーゲル先生から、ブッシュとオサマ・ビンラディンはそんなに遠い関係ではなくて、結構仲がいいというわさがあるいうお話がありました。確かに石油、あるいはいろいろな情報を通じて、そんなに切り離された敵と味方ではない。むしろブッシュがこう言ったらビンラディンはそら見ろと言えるからすごいというように、ビンラディンが何か言うとブッシュがテロ戦争だと言うとか、つるんでいるかどうかまではとても言えませんが、お互いそれで得をしているわけです。

冷戦時代でも、ソ連がミサイルをと言うとアメリカが軍備するし、アメリカが軍備するからとソ連が軍備するという、お互い敵と味方の暴力集団というのは持ちつ持たれつのところがあります。山口組と住吉会みたいに、お互いの敵がいるので結束する。そう考えてみると、こういう暴力の構造を解いていくには、やはりそういうものが動きにくい社会をつくっていくしかないのではないと思います。

暴力の６つの要素というものを簡単に挙げました。さきほど言ったように、日本の軍隊やアメリカの軍隊、あるいは国連軍、警察といったフォーマルな合法的正当的なものも、いま言ったようなマフィア集団、武装勢力、国際テロ組織と呼ばれるようなものも、はっきり言ってしまえばプロの暴力集団なので、要するに６つの要素があるだろう。これは当たり前のことで会社やNGO、政府と一緒ですが、要するに、ある人間組織としてどう動くかということです。

客観的なものから言えば、戦うので「武器」がいる。そのための「資金」、人や武器を調達する資金源、情報を調達するためにもお金が要る。いろいろな形で「情報」が要る。自分たちだけではなくて各種のマフィア集団、国際テロ組織、マフィア集団、CIAなどいろいろあるわけですが、そういうものをリンクする「ネットワーク」が必要。そういうものは、NGO、国際機関や政府も武器というところが貿易商品だったりするだけで会社も同じです。そして、それを動かす「人」と「信念」が要ります。

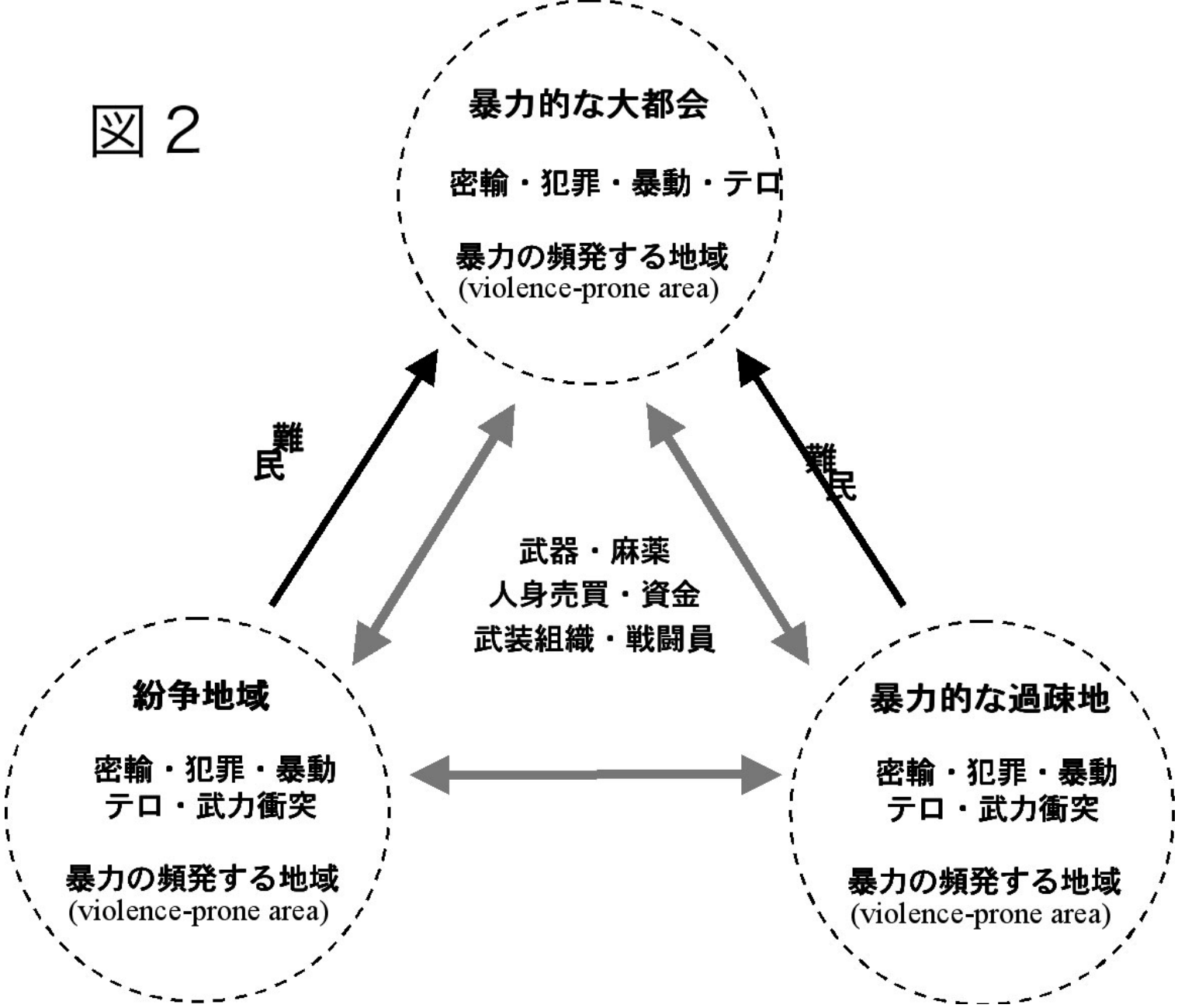
真ん中に、「信念」とその信念を持ってそれを行う「人」がいる、と考えます。「信

念」というのは突き詰めていくと、暴力組織の場合には人を殺して物を破壊しても実現する大義があると信じているということでしょう。これは、正規の軍隊であっても、違法なマフィア的な集団であっても、基本的に共通している点です。武器を持って人を殺しに行くということが、組織の目的となっている。そして、その目的を敢行するには、自分の命も危険にさらす恐れを認識している、そういう人たちの集団です。実は、自分の命を犠牲にしても何かをしようと思うと、その瞬間に、それを邪魔する人は殺してもいいと考えなければならないことになります。この論理のダイナミクスは、けっこう見落とされがちですが、武装して戦う人々の重要な行動原理となります。ですから、変な話ですが、自分の命を大事にしない人は、人の命も大事にしない可能性があるのです。いいかえれば、自分を犠牲にする覚悟をしている人は、他者にも犠牲を強いる冷酷さを備えられる、ということなのです。そして、非常に極端な思想が核に置かれて、それに共鳴する人々、殊に若者とか、あるいはお金持ちとかいろいろな人たちがかかわって暴力集団ができます。

これは正規の軍隊でも同じですね。自衛隊であろうが、たとえ災害救助でも非常に危険が伴います。ましてやイラクまで行くとすると、命を犠牲にする可能性があって行くわけですから、日本の利益になると思わなければ行けないわけです。これは他国の軍隊でも国連軍でも同様なことだと思います。また、　そこら辺の失業したおにいちゃんがリクルートされるような暴力団的なものであっても、何か事があれば親分のために命をささげるとか、あるいは自分の民族とか宗教のために命をささげると誓っているとか、そういう点では、軍隊に似ています。宗教や民族を掲げた過激なグループはもちろんそうです。ですので、この６つの要素が組み合わさってプロの暴力集団ができると思っています。

こういう暴力集団の、殊にインフォーマルな部分が活躍するのが、図２で「暴力の空間」と示したところです。「暴力の空間」という概念も一種のタイポロジーです。自分がインド研究者なのでやはりインドのイメージを被せてしまっていますが、それでも世界的にそのように言えると思います。危険で貧しい世界が、マージナルにされ、暴力の起こりやすい地域となっていると、この図で示しています。

図２

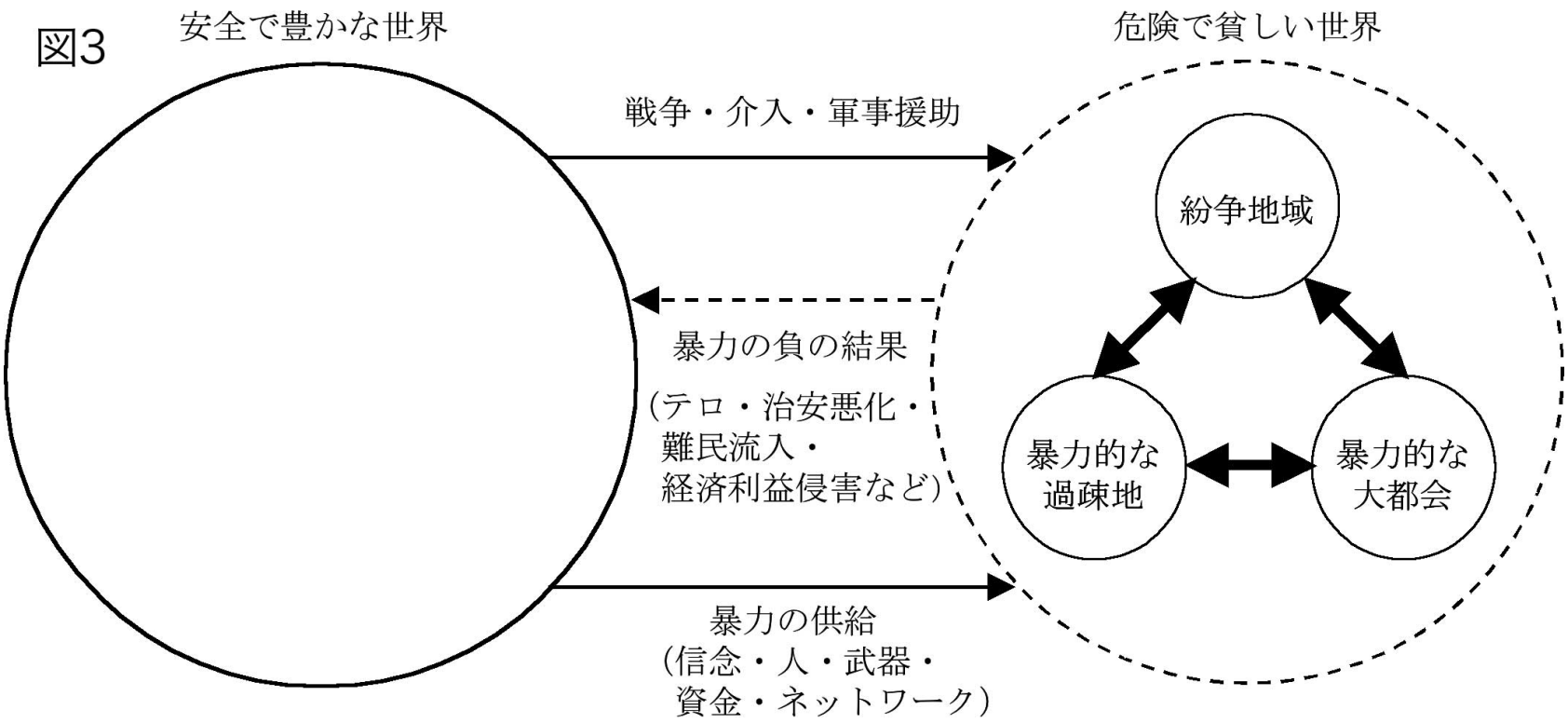


そうした「暴力の空間」の１つが紛争地域です。２番目が、暴力的な過疎地、要するに盗賊団が出たりするような、国家から放置されたような地域です。具体的には、ジャングル、砂漠、山とか、貧しい農村地域ですね。それと、そういうものと暴力の要素の点ではリンクしている暴力的な大都会が、第３の「暴力の空間」です。まさに、グローバリゼーションの中にある大商業都市に、こうした空間があります。そこには現在、たいてい大きなスラムが広がっています。冷戦後民主化した国々、その結果、人々の移動が自由になった国々、社会主義から自由化した国々、中国、東ヨーロッパ、ロシアといった地域では、とくにそうした現象が急速に進んでいます。それから、経済難民も多いですが、紛争地域や暴力的な過疎地から大都市のスラムに逃げてくるという人々が多い。あるいは、難民キャンプを経て国内や他国の大都市へ逃げ、そこのスラムに住み着くというリンクがつくられていると思っています。そういう「暴力の連鎖」が現代世界の３つの「暴力の空間」を結んでいるのではないでしょうか。

対テロ戦争という言葉が頻繁に使われますが、いったいわれわれはどこのどんな人々と戦っているのでしょうか。普通の市民は、安全で豊かな世界の中に住んでおり、基本的に暴力は社会の外から襲って来ると考えます。実はアメリカ国内にテロリストが数多く潜んでいるのかもしれませんが、アメリカ政府はテロリストが国外から来ると言わなければ選挙戦にも勝てない。さらには、そういう形でしか戦えない。国の中までテロリストに侵食されているとすれば、怖すぎるのです。炭疽菌入りの郵便物の事件は、まさにそうしたセンシティブな点を突いたわけです。けれども、安全保障の専門家は、危険

な怪しい世界は外にあることにして話を進めます。「ならず者国家」とか、中東のイラクやイラン、東アジアの北朝鮮が「敵」だというわけです。けれども、テロやその他の現代的暴力の問題は、各国に内在化した問題だという点なのです。テロは、国境とか先進国—途上国といったボーダーでは止まってくれないからです。

そして、戦争、内戦、テロ、暴動といっても、基本的には人間が起こすことなので、結局は「人間的な連鎖」です。暴力を使って何かしようとする人は、どのように世界的につながっているのか。対テロ戦争の構図ではっきりしたのは、まさにグローバリゼーションの時代だからこそ、危険で貧しい世界と安全で豊かな世界は、複雑に結びついているということです。たくさんの人が移民や留学をする。自分の国にいたときには思いもつかなかったような、排外主義の的となるという経験をしたり、マージナルで疎外されて貧しいところに追いやられるという経験をする。こうして、ほっておけば自分だけでなく自分の家族や、ことに学校で子供がいじめられるという状況を抱えた移民の人たちが、過激な自己正当化のイデオロギーをつくりやすいという構図が用意されます。



逆に言うと、安全で豊かな世界のほうが、中側に貧しい異質な人々を疎外するような構造を持っていて、そこにどんどん外国の人たちが入って来る。たとえば、アメリカに来たインドの人々どのような経験をするだろう。ヒンドゥーの人たちがインドからアメリカへ行くと、当然マイノリティーになります。自国ではマジョリティーだけれども、英語を話すクリスチャンの国では、マイノリティーにしかなれないのです。けれども、子供には自分たちのヒンドゥーの伝統や教えを伝えたい。だから、自分たちのお寺もつくるし、自分たちのコミュニティーセンターもつくる。しかし、学校では黒人と呼ばれて差別されたりする。自分の国ではミドルクラスで大学まで出たとのに、子供も自分も肌の色だけで差別される。自分の国では召使いも使っていてカーストも高いのに、差別されるだけでなく、安価な賃金で汚れ仕事をさせられる。もちろん、大きな家には住めない。文化の違いだけでなく、こうした挫折の経験ですね。

けれども、その中から成功する人たちも出てきます。そして、ある程度余裕のある人々がお金を出して、大学にヒンドゥー教を研究する寄附講座をつくるとか、お寺を建

てるとか、しています。アメリカやカナダなどの大学には、シーク教徒の講座やイスラムの講座が作られました。ですから、豊かで安全な世界の中にある、異質で貧しい新参者を差別する構造が、そこによそから入ってきた人たちに特定の挫折体験を強い、次第に自己正当化をするようなイデオロギーを培養するというダイナミズムがあります。

そういうサイクルにそって、アメリカやイギリスでイスラム、ヒンドゥー、シークなど、アジアの宗教についての本が出版されます。さらに、グローバリゼーションの時代なので、アメリカや欧米から本国に逆輸入されます。たとえば、コロンビア大学出版の本がお墨付きで入ってきます。オーソドックスなものが書かれているはずですが、古いとされながら、実は非常に新しいファンダメンタリズムの叙述が数多く出されます。そして、それらが改めて本家の国に送られ、それを信じる人を増やして根づいていく。周りの地域や国からも、そうした新しい思想を学びに聖地にくる人も増える。イスラムだったら、たとえば東南アジアや南アジアから中東という遠いところに人々が行く。こうして、新しいファンダメンタリズムの教えが広まっていきます。移民している人が、子供を本国の聖地に送り戻したりします。ユダヤ教の国であるイスラエルも、欧米との間でそういう関係をずっと維持しています。つまり、すでに移民した人が母国に、つまり、インド人でもう２代目なのだけどもアメリカからインドに自分の子供を留学させます。

オサマ・ビンラディンだけでなく、アルカイダで非常に注目されたのは、欧米に留学した非常に優秀な、しかも豊かな青年たちが中核になっていた点でした。この現象は、アルカイダに限られません。グローバリゼーションの時代に、なぜ排外主義的なファンダメンタリズムの思想が現れるのか。しかも、非常に速い速度で普及するのか。この問題を解くのが、先進欧米諸国と途上国の最近の関係です。ですから、アメリカを大好きなインド人がたくさんいると同時に、アメリカに差別されるインド人が急速につくられる。そういう「ディアスポラ」の思想とダイナミクスが、対テロ戦争の時代に、異種の２つの世界を結ぶ１つの鍵になっていると思っています。

4. 紛争の地図――なぜイスラムか？　なぜアメリカが対決するのか？

「紛争の地図」と書いたのですが、もっと言えば、なぜいま対テロ戦争でイスラムが敵になっているのか、なぜアメリカが対決するのかという問題です。私が得意なところで、アフガニスタン・パキスタン・カシミール・インドのつながりを説明しましょう。

最初の、破壊の光景、というところでお話しましたように、今、ニュースばかりがメディアでバンバン入ってきます。イスラムは怖い、ハンチントンが言ったとおりだったとかという感じで、「文明の衝突」だとか、「イスラム圏は危険だ」と思ったりする可能性があります。しかし、中東、中でもパレスチナ・イスラエル問題、イラク問題、イラン問題、アフガニスタン問題、あるいは南アジアのカシミール問題は、それぞれ別々の問題でもあります。さらに、インドネシアの問題だって、全然違います。これまでは、密な関係性はそこまでなかった。フィリピンのイスラムも同様です。けれども、そ

うした関係が、90年代以降、急速に変わってきています。

アメリカの中東介入、そういう流れの中でアメリカの近代化路線に反発して起こったイラン革命、それに押さえようとするアメリカの大義の下の軍事・外交政策、そこかイラン封じ込めのためにイラクのフセイン政権を使って、アメリカが支援を行った時代、さらに1988年以降、イラン・イラク戦争の終了とイランの穏健化によって、対イラク支援が終わった後。そして、1990年に、今度はアメリカが盟友としていたイラクがクエートを侵攻した。イラクがアメリカの味方だったのに、今度はいきなり敵になってしまった。そこで湾岸戦争。逆に言うと、こうしたできごとのつながりを見ただけでも、イスラムは１つではなかった。

歴史的には、クリスチャン陣営の中でのカトリックとプロテスタントとは戦いはすざましかったし、アングリカン・チャーチとかいろいろありますが、実は１つではありませんね。だから、イスラムだっていろいろ広い範囲で信仰されています。中東の真ん中の人は、アフガニスタンなんてあんな田舎のものは本当のイスラムではないとか、パキスタンでもカシミールなんてあんなのは全然違う、本当のイスラムでないからきちんと改宗させなければいけないとかと言ったりしてきました。また、東南アジアのインドネシアなんか、アラブとは全然違うイスラムだとかと言われたりしてきます。つまり、お互いにあそこは田舎だとか、こっちは正統だとか、シーアだとかスンニだとか、その中でも何派だとか、あんなのは信じてはいけないとか、もう一度再改宗させなければいけないとか、いろいろなことを思っているのです。だから、イスラム世界とは言っても全く１つではなかったし、いまでもそうとはいえません。

しかし、なぜそれが１つになってきてしまったように見えて、しかも全部がアメリカの敵のような感じになっているのか。それも、アメリカが認識するだけではなくて、イスラムの中から反米という合唱の声が出てきているのか。とくに、アメリカが歴史的な干渉を行ったり、逆に軍事支援や介入を行ったところで、そうした現象が見られます。イランやパキスタン、イラクはそうです。以前は親米だった時代がありますが、最初は親米でも、後に痛い目に遭ったために、みんな反米になっていく。

なぜ痛い目に遭うかと言うと、これは簡単なことですが、アメリカが必要なときには、おまえがいないとアメリカは困るからとお金や軍事力をあげるわけです。イラン、イラク、パキスタンにもそうしました。けれども、そこでの紛争が終わったり、アメリカの関心がなくなったり、大統領がかわったり、あるいはソ連が解体したり、ともかくアメリカの状況が変わってもう協力は要りませんとなると、いままで軍事援助していたのに、はい、さようなら。それだけではなくて、いままで軍事援助しているから、相手は結構地域軍事大国になっていて、脅威になっていたりして、「おまえは核を持っているのではないか」と。パキスタンもイラクもそうです。イラクは核を持っているのではないか。だから、今度は統制しようとし、言うことをきかないと罰を加える。もっと軍縮しろと言うわけです。

アメリカ議会は、すぐころっと立場を変えやすい。核不拡散のためにパキスタンには

もう軍事援助はできないとか、とすごく聞こえがいいことを言うのですが、つい２年前までは軍事支援していたのに、いきなり、さようなら、みたいになる。アメリカがイランを封じ込めるときにはフセイン体制を支援してきた。あるいは、アメリカがアフガン内戦に介入して、冷戦時代の80年代ですから直接に米軍が派兵できないし、派兵すればソ連との直接対決になってしまう。だから、パキスタンの軍事政権だろうが何だろうが、自由陣営アメリカの味方にして軍事援助をした。しかし、ソ連が88年に撤退したら、もう米ソ戦としてアフガニスタンは要らないので、内戦でもいいじゃないですかということになって手を引く。パキスタンの軍事政権は使用価値がなくなりました。パキスタンの大統領はいままでアメリカを力の背景にしていましたが、アメリカが手を引くことに決めた88年に、アメリカにとって運よくというか、偶然に飛行機事故で死に、この国は民主化の方向へ進むことになりました。そして民主化すると、今度は、パキスタンには核疑惑があると言って、アメリカは援助をカットして制裁すると言う。ソ連はもういないし、この地域にアメリカの敵はいない。だから、アフガニスタンは内戦で結構。暴力的な世界だろうと何だろうが、アメリカの利益には関係ないのでもうお金も出しません。その結果、パキスタンの中には、いままでものすごく親米だった人も含めて、反米の世論が育まれます。

　それだけではなくて、アフガニスタンの内戦に干渉するためにアメリカはイスラム武装勢力とパキスタン軍のリンクを育てて使いました。ですから、パキスタンの軍や社会にはイスラム・ファンダメンタリズムが浸透していきます。アメリカは手を引いたが、社会の基層部も含めてイスラム・ファンダメンタリズムが広がり、それに影響された軍の組織は残ります。そうすると、アメリカがかつて利用し、反米に転じたイスラム武装勢力が内戦下に残る、あるいはパキスタン軍とパキスタン社会にイスラム・ファンダメンタリズムの組織が残る。こういう構造が90年代のパキスタン、そして内戦状況のアフガニスタンに展開していきます。

　ですから、いままでアメリカが国益のために使っていた「暴力の構図」が、その後、反米に向かうような「暴力の構図」に変わったのです。パキスタンの中にタリバーンの基礎が築かれ、アフガニスタンとパキスタンが手をつないでイスラム勢力を結びつけ、インドとかパキスタンが対立して分割して、しかも緊張が半世紀以上続いているカシミールにも、軍備を拡大したパキスタン軍が援助をしてアフガニスタンから武装勢力が入っていく。それまではカシミールの武装勢力はそこまで近代的な武装をしていなかったようですが、90年代にはアフガニスタン内戦で活躍した武装勢力がある意味で失業状態にあったために、どこでも行きますよという状態になります。そして、パキスタンを経由してカシミールに入り、武装勢力としてインド軍と衝突する事件を起こしました。さらに、カシミールの若者がリクルートされ、パキスタンを通ってアフガニスタンに行き、軍事訓練を受けてもう一度戻ってくる。そういうリンクが90年代に強くなります。

　こういう流れの上に、タリバーンがアルカイダを生んで、そして、オサマ・ビンラディンがアルカイダの基地をつくるという展開となり、90年代後半を迎えます。ですから、皆様が御存じのように、ビンラディン自身も最初はアフガン内戦を戦うためにアフ

ガンに行って、実証はなかなか難しいのですが、言われているところによるとCIAが訓練して、イスラム武装勢力としてソ連軍に対決するために活動したサウジアラビア人であるということになっています。ですから、ここにもまた、米ソがアフガンで対決したときにアメリカが使った人が、アメリカの影響力がアフガンから撤退した後、捨てられて反米になったという構図があります。そのすぐ後、湾岸戦争でイラクを攻撃するためにサウジアラビアを基地とした米軍が立ち去らない。アメリカがなぜ湾岸戦争を起こしたのか。こうした経緯の中で、ビンラディンは、アメリカに利用されて捨てられたことを恨みに思って、反米の闘いを始めたと言われます。

こういう「紛争の構図」を見てよく考えてみると、大統領選挙のたびに、あるいは何かが起こるたびに、アメリカが自国の利益としてつくり出した敵と味方の構造が、アメリカ自身の都合でひっくり返されていく。そのとき、いままで味方だった武装勢力や軍事政権が反米勢力になっていく。これをつなげていくと、おそらく現在のイスラム世界がアメリカの敵となる、という構図になります。

5. 暴力の文化と処方箋

そういう流れの中で、インドでも、イスラム・ファンダメンタリズムに対決するために、ヒンドゥー右翼が90年代に高まります。イスラムは国内ではマイノリティーですが、周囲の国々はイスラムがマジョリティーの国が多い。背景には、イスラムの組織には、中東からのお金が送られてきて、ヒンドゥーの側に焦りが生まれたという事情もあります。ただそれだけではなく、先ほど言ったように、グローバリゼーションの時代には、インドという価値が下がってしまった。客観的だけでなく、主観的にも下がってしまった。これは、感覚的には、ロシアとか中国についてもそういう説明がつくと思います。それまでは大国だった、社会主義インドだった。すべてMade in Indiaだと。本当にそういうすごくプライドがある人たちだった。われわれが文明をつくったのだ、ゼロとか、日本語だってインドから来ただろうというぐらい自信があったわけです。車も列車も全部Made in India。コンピュータだってMade in India。80年代はまだそういう感じの時代だった。しかし、社会主義を放棄して自由化すると、90年代に何が起こったか。これはソ連も中国も同じです。

90年代は、Made in Indiaというのは出来損ない。はっきり言うと、パナソニックとかメルセデスベンツ、ホンダ、フォードとかがいいわけです。いまは政府の車とタクシーだけがまだMade in Indiaです。ですから、目の前でグローバリゼーションがうわーっと進み、インド人としての自信が打ち破られた。そして、貧しいからいいものが買えない。ですから、インド人は急に自信がなくなってしまって、本当にマイルドになってしまいました。昔はすごくいばっていたのですが、最近はあまりいばっていません。

人間は、すごく自信があるときは、帝国主義的な考え方もするかもしれませんが、非常に寛容な考え方もできる。豊かな気持ちだと、国内のマイノリティーとか小国に対してケアをしたり、あるいはお互いさまみたいなことが言えたりします。しかし、アメリ

カがトップ、先進国がトップ、インドはボトムという発想になる。しかも多くの人たちがグローバリゼーションで外に移民で行きます。そうすると、要するに、インド人としてのアイデンティティーをどこで担保するかというと、もうMade in Indiaの公共物資とかテレビではだめなわけです。生活程度も貧乏だとわかってしまいます。テレビにCNN、BBC、ディズニーとかが映り、自分たちの国がいかに貧しいかがわかるからです。

そうすると、自信を持つためにすぐできてお金がかからないものというのは、独自のアイデンティティーです。これが、一番お金がかからない。しかも、民主主義の中では政治家は選挙に勝たなければいけない。こっちではＩＢＭとかホンダとかに負けていてどうぞ、どうぞ、よく言えば切り下げ、安くて結構ですと言っておいて、こっちでは「インドは永遠なり」と言うと、選挙で勝ちます。

もっと言ってしまえば、これも変ですが、民主化と暴動や内戦がセットで起こってきます。政治家は選挙で勝たなければいけない。そのときに理想像が周りにありません。社会福祉をしますとか、皆さんのよりよい生活を５年後に保障しますとかできないわけです。できないとすると、セルビア人のわれわれの故郷を奪還しようとか、そういうのはすごく簡単なわけです。簡単というか、安上がりだし、しかも結束できる。そういうものとセットだとわかるのは、恐ろしいことにだいたい選挙の前に暴動が起こるという現象のためです。

緊張の中で選挙は非常に危険なゲームとなります。どうしてかと言うと、選挙前にマフィア組織や右翼組織が暴動を起こして、マイノリティーをターゲットに攻撃する。例えば、イスラム教徒をヒンドゥー教徒が殺すという事件を演出して暴動を起こす。そうすると、マイノリティーは怖いので、みんな避難してしまい、例えば10-20万人規模とかで難民キャンプに行ってしまいます。そうすると、これまでの選挙区の投票権が行使できず、新しいところでは投票できない可能性があります。そして、従来の選挙区からはイスラムがみんないなくなってしまう。だからヒンドゥーだけになって、ヒンドゥー政党が勝つ。あるいは、いまのブッシュの反テロ・キャンペーンもそうですが、そのキャンペーンだけで、怖いからやはりマジョリティーの政権党に入れておこうと。そういうことが90年代のインドでも進行しました。

ですので、例えばインドでは90年代に、民主化と自由化、それからグローバリゼーション、右翼、ファンダメンタリズム、暴力というのがセットで起こりました。インドだけではなく、いろいろな地域で見られた現象だと思っています。冷戦後と言われる20年間ぐらい、そういう暴力が非常に根づきやすい政治経済構造が世界的に広がったのではないかと考えています。

それをどう絶ち切るか。実は、いまそれが問題です。要するに、国際テロ組織をどうカットするかといったときに、例えば各地のマフィア集団とか、そういうものとつながった銀行取引とか、テロリストが逃げていくのはどこか、そういう問題を含めて、いかに世界各地がリンクしているのかがわかると思います。つまり、ビンラディンはアフガ

ンからいったいどこへ行ったのか。アメリカに捕まっていたのではないかという説がありましたが、やはり捕まっていなかった、あるいはブッシュが逃がしたのかもしれません。わかりませんが、逃げているとすると、アフガンからパキスタンに行くのか、カシミールに行くというルートもあり得るし、あるいは旧ソ連圏に逃げるというのもあるかもしれない。イスラムと言うと、フィリピン、マレーシア、インドネシアとかこちらの近くまで来ます。

ですから、逆に言うと、対テロ戦争というのは、バグダッドに爆弾を落として簡単に終わるというものではない。ある国を占領したところで終わることでもないということがわかると思います。ある国を「ならず者国家」として、戦争をして敗北させて、占領し無理矢理民主化させて、それで安全になりましたというわけではないということです。そういうことをしても、みんな逃げますし、死んだ人にはかわって新しい世代の若者が出てきます。もちろん、武装訓練します。いまスーダンが緊迫した問題になっていますが、危険で貧しい世界だとラベルを張られたある国が、仮に国際社会の対テロ戦争で占領されて、民主化して和平化したとしたら、そこから暴力が根づいた空間のところにまた逃げて、そこでまた基地をつくる。またそこに何かあると、また逃げて……ということです。

ですから、それを解決するのは、軍事力によってどこか外国を爆破して終わる、あるいは占領して民主化して和平化して終わるということでは、おそらくないだろう。そのスキームで始めたアフガニスタンも非常に危ないですが、イラクは最初の企画が全く成功しないと恐れがあります。戦争が終わらない、泥沼になっているということです。ですから、日本の自衛隊は抗戦しない軍事力として、カメみたいにサマに閉じこもっているわけですが、泥舟に乗っているということになります。

6. 暴力の連鎖を解くのは誰か

暴力の連鎖を解くのは誰かということですが、基本的にはあきらめないで、焦らないで、頭にあまり来ないで、要するにじっくり社会を変革していくしかないと思います。じっくりと危険で貧しい世界を少なくしていくしかない。貧しさというのはGNPではありませんので、収入が低くても安全な楽しい村というのはあり得る。これはアマルティア・センが書いていますが、それはいま非常になくなりつつある。収入が低いとそのまま危険になってしまう、荒れてしまう、若者はどんどん出て行ってしまうということになります。ですから、逆に言うと、いまある世界の中の暴力地域になりやすいような貧しい社会を、そうならないように市民社会の方向に組み込んでいくということだと思います。

それを考えるときに、どのような考え方かということになるのですが、要するに、私たちは安全で豊かな世界に、しかもかなりトップの位置にある国にいますので、どうしても危険で貧しい世界の人々の苦しみとか具体的な状況というものには理解が及びにくい。逆に言うと、爆弾を落として何とか解決したい、あるいは自国の安全保障の壁を上

げて悪い奴が入らないようにしたい、入ってきたらすぐ取り締まって、難民で変なのが入ってきたら追い出す、ということを考えやすい立場にあるわけです。つまり、ミドルクラスが貧しい人たちをスラムに追いやって見ないことにする、自分たちの地域のごみを貧しいスラムの方に追いやって終わりにする、あるいは東京で捨てられないごみをフィリピンで捨てる、東京に置きたくない工場をフィリピンや中国に持っていく。要するに汚くて危険なものや貧しくて見たくないものはどこか違うところに入れて見えないことにして、そこから壁にして入れないにする。そういう認識と方法をとる限り、この２つの世界の分断は深まりこそすれ、なくなりはしない。なくならないとすれば、その間の暴力の構造は変わらないと思います。やはり両方の世界を緩やかに結びながら、少しずつですが、危険で貧しい世界を減らしていくことが重要なのではないかと思っています。

ですから、いまもっとも必要なところは「いじめないという論理の確立」です。日本でいう「いじめの構造」と似ているので、「いじめ」という言葉を使ってみますが、要するに、強いマジョリティーの先進国の側が、弱いマイノリティーの途上国の側、あるいは紛争地域に、暴力をふるわないという約束をするということです。これが大事だと思っています。

さきほど言いましたように、民主主義国家は必ずしも平和的な国家ではない。戦後、日本は民主主義と平和はセットなのだと何となく思っていた。民主主義憲法と憲法９条はセットだろうと思っていたのですが、よく考えてみると、アメリカは民主主義で戦争ばかりしています。ですから、民主主義と戦争というのは別に相性が悪いわけではない。先ほど言いましたように、民主主義の中からものすごい右翼が出てくる。マジョリティーを背景にした好戦的な右翼というのは、常に民主主義の中から出てきます。排斥的な勢力というのは、マジョリティーを獲得すればとても人気がある。オーストラリアはハワード政権がずっと続いていますが、やはり人気があるのです。ですから、民主化したから終わりではなくて、自由化して民主主義となった地域も含めて、そしていままでの民主主義国家も含めて、もう一度改めて暴力を使わない、あるいは戦争をしないという原則を、民主主義社会の中にどう組み込んでいくか。そうした課題を、はっきり考えなければいけない時になっています。

私は、憲法９条を守れとか何とかという古い論争に入る、どことなく怖い人がいっぱい出てくるので嫌なのですが、日本がもう一度、民主主義であるけれども絶対に戦争をしませんと、国家的な約束することには、大変意味があると思っています。憲法９条はいままで古い古いと言われていましたが、アメリカは日本にしたことと同じことをイラクやアフガニスタンにしているのです。民主化して和平化して、日本はある意味ではアフガンとかイラクのようだったわけです。だから、いまの段階で、日本が絶対に戦争をしない、軍隊を戦争地域に送らない、戦争の加担をしないということをはっきり採択し直すことは、非常に意味のあることだと思っています。それは民主主義を、自分たちの手で非暴力化することにつながる一歩だと思っています。憲法９条の再確認には、歴史的な意義があります。

もう１つは、いじめられない自分をつくる人たちをどうサポートするかということです。紛争地域や荒れた辺境地域、スラム社会と言っても、どこもかしこも荒れているわけではない。中には、スラムの人たち自身が、NGOや国際機関、政府機関とかいろいろな人たちの助力を得ながら、例えば、識字教育をベースにしたり、医療サービスを自分たちで実施するベースを作ったり、スラムのコミュニティー活性化を行うなど、いろいろな形でいじめられない自分たちを形成しようとしています。つまり、市民社会のエンパワーメントとコミュニティー構築の努力です。

例えば、ボンベイで暴動が起こった。そういうときは、とてもとどめられないことが多い。けれども、よく見てみると、暴動が起こった後も安全に残ったスラムと、暴動の波に巻き込まれてしまったスラムがある。どういうところが違うのだろうと理由を探していくと、例えば、あるスラムで日ごろからイスラムとヒンドゥーの子供たちを一緒に育て、一緒に遊ばせるといった、宗教の違いを越えたコミュニティー活動を行っていた。だから、いざ何か起こったときにヒンドゥーとイスラムで殺し合わなくても済むように、むしろ居住地区のコミュニティーが協力できた。こうして、いろいろなネットワークを日ごろから教育や保険など地域の活動で形成し維持することが大事だということがわかってきました。そうすると、暴動が起こったら、だいたいよそ者のプロがやってきて騒動を煽るので、そうした人々が自分たちの地区には入ってこないように、自分たちでお金を出し合って鍵のある門をつくりましょうとか、そんなことが行われています。そういう市民社会のエンパワーメントやコミュニティーの復活を、NGOやさまざまな政府機関、あるいは国際的なものだけではなくて国内のプロがいろいろな形でアイデアを出して支えています。殊に専門家として、法律家はすごい力になりますし、ジャーナリストや医者、教師もそうです。

逆に、いま言ったようなコミュニティーの仕事をやらないとどうなるか。暴力団やマフィア組織なども含めて、善良な組織だけでなく、おかしな宗教グループなどが活躍の余地を見出します。国家が社会福祉とか安全を提供してくれない、誰も何もしてくれない、自分たちの居住区の中にも積極的なイニシアティブをとる人がいないということになると、そういう暴力団的なものとか、宗教的なファンダメンタリスト・グループなど、地域の基盤をつくりたい組織が根付きます。そして、若者たちに仕事を分け与えます。地震とか洪水などの災害が起こると、それを機にして復興運動をし、右翼や宗教集団のおにいちゃんたちが雇われて鉢巻きして活躍します。でも、逆に言うと、自分たちの地元のNGOやとかコミュニティー・グループが強いところでは、そういう組織は入る余地を見出しにくくなります。ですから、そういう市民のエンパワーメントとコミュニティーの復活という部分を、軍事力ではなくて、経済力とか市民のパワーで豊かな国の人々が支援することは重要です。それは、現実に既にたくさん行われていますし、もっと発展させることができると思います。

インドも、それこそグローバリゼーションによって、民主主義がこれまでとは違った形で非常にダイナミックに変化しました。そういう中で右翼が台頭したり、戦争したり、核保有したり、暴動が起こったり、いろいろな暴力を経験しました。けれども、民

主主義の展開過程で、このごろようやく、援助というものは、アメリカやヨーロッパ、日本から来る外国のものが第一ではなく、まず同じ国の市民が自国のほかの人たちを支援するものであるはずだ、という考え方が力を持ちつつあります。変な話ですが、デリー、ボンベイ（現ムンバイ）、カルカッタなどの知識人や専門家、あるいは一般の市民が、運動や組織を基礎に、インドの他の地域の人々を支援するということは、そこまで活発ではありませんでした。インドの中で、自分たちのお金を寄付して送って同じ国民の仲間を助けるという発想は、ポストコロニアルな社会の性格を反映して、弱いものでした。けれども、この間のグジャラートの地震とか暴動、あるいはカシミール紛争など、2000年代に起こった災害については、国内で市民がいろいろな形で助け合う活動が、非常に活発に観察されました。つまり、自分たちの国を市民社会が自律的に支えるようになってきたのだと思います。

印パ関係についても、アメリカに頼って解決しようとするのではなくて、自分たちの市民交流でボーダーというか国境を下げましょうと。例えば、両国にとっての独立記念日は、逆に戦争の始まりといった歴史的意味合いがありますが、その独立記念日に国境に両方から市民が行って、夜中にろうそくを立てて歌を歌おうとか、そうした行事がいくつも執り行われています。また、従来はなかなかそれぞれの隣国に入れなかったのですが、「何百人も同時にビザを応募すれば、官僚機構がパンクするからみんな入れてくれる。だから、みんなでビザを応募しよう」と言う運動が1990年代終わりに始まり、インドから大量に行くようになったり、パキスタンから来るようになりました。その結果、市民のさまざまな活動によって、国境線の緊張とか国境の高さを下げようという動きが展開し、今では経済的な交流も進んで、両国の相手国イメージは大きく変わり、インドではほとんどパキスタン・ブームのような現象も見られます。

日本で国際協力というと、何となく日本のような豊かな国から貧しい途上国への援助という固定的な発想をしてしまいます。けれども、例えばインドのような民主主義で経済敵にも自由化した国においては、その国の市民活やNGO活動があります。いいかえれば、同じ国の中の安全で豊かな世界の人々が、危険で貧しい世界の人々と手をつないで問題を解決していこうという、活発な動きがあります。ですから、国際協力も、そういう相手国の市民的な活動とリンクしつつ、サポートできるところでサポートしていこうというものに変わっていくと思います。昔の構造とは少し違う形の、いわば相互連携の、市民的ネットワーキングの時代ですね。

最後にもう一度、「暴力の連鎖を解くのは誰か」という問題に戻りましょう。問題を解く鍵を持っているのは、プロの暴力集団に属していない人たち、武器を持たず暴力を使わない、つまり人を殺したり傷つけないことを信念としている人たちではないでしょうか。そういう非暴力の人々が社会の主役となり、さまざまな困難に平和的な手段によって立ち向かっていく。そうした日々の地道な活動の中に、暴力の連鎖を解く知恵と力を、私たち自身が発見していくことができると思っています。

——竹中氏　講演　終了